

オリコンサル、東芝 港区でEVバス実証運行

テープカットする野崎社長（右端）と近藤部長（左から2番目）



オリエンタルコンサルタンツと東芝は1日、東京都港区で電気自動車（EV）コミュニティバスの実証運行を始めた。東芝は運行で得られたデータを基に急速充電が可能で、寿命が長い2次電池（SCiB）や定置用蓄電池の技術改良につなげる。オリエンタルコンサルタンツは交通運用プランの立案などバス事業者がEVバスを導入しやすいシステムを確立する。1月31日に発売式

が行われ、オリエンタルコンサルタンツの野崎秀則社長や、東芝社会インフラシステムの近藤弘和鉄道・自動車システム事業部長らがテープカットを行い、運行開始を祝った。

出発式で近藤部長は「港区の街の魅力を最大限に引き出すスマートコミュニティの技術を用いて街をより良く快適に付加価値のあるものに変えていきたい。20年の東京五輪に向けてEVバスのソリューションを本格的に実現したい」とあいさつした。

野崎社長は「実証運行をモニタリングし、EVバスを通じて安全、安心、快適な公共交通がどうあるべきか、環境負荷にどのよつな効果があるのかを検討し、社会に貢献していきたい」と述べた。

実証運行は3月14日まで東京都港区で運行しているコミュニティバス（ちいばす）の路線を活用し、田町駅～新橋駅間（1日6便）で行う。EVの技術特性を考慮した最適な交通運用プランを探るほか、EVを円滑に運行するための都市空間設計や道路インフラのあり方などの検討に結果を役立てる。

両社は実証事業を通じて蓄積した知見を国内外で行う交通ソリューション事業やスマートコミュニティ事業に生かし、事業規模の拡大につなげる。